論文の内容の要旨

氏名：禰覇凌也
博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）
論文題名：「横断文学者寺山修司の試み～俳句と短歌の統合に向けて～」

本論文は「横断文学者寺山修司の試み～俳句と短歌の統合に向けて～」と題し、俳句から短歌へ、そして演劇や映画へといったジャンル横断を繰り返した寺山修司（1935―1983）の文学的本質を考察することを出発点としている。

これまでの寺山の俳句から短歌への横断に関する研究は寺山の実人生や「俳句を短歌に引用した」という事実を中心として扱うものが多く、技術的な面から批評したものは非常に少ないのが現状である。この現状を踏まえて、本論文では寺山の短歌と俳句を題材に、どのような技術や意識によってジャンル横断を試みたのかの分析を行った。この分析によって前衛歌人としての寺山修司の功績を再評価すると共に、寺山が創作において実現を目指した目標と、その際に直面した課題を明確にすることを目標とした。

本論文では、寺山の短歌のデビュー作である「チェホフ祭」（1954 年）を書く際の創作意識について書いたエッセイ「ロミイの代辯――短詩型へのエチュード」（1955 年）を中心に扱った。当エッセイでは特に意識した四項目として「現代の連歌」「第三人物の設計」「単語構成作法」「短歌有季考」が挙げられている。この内、「短歌有季考」を除く三項目を特に各章の主題として扱った。

第一章では「現代の連歌」について扱った。これは俳句に七七を付けることで短歌を創作するという手法である。寺山はこれについて「テーマある現代詩的可能性をも持ちうるのではないか」と述べ、さらなるジャンル越境への可能性を示唆していた。

論者がこの手法において注目したのは、俳句の句切れをどのように処理したかという問題である。寺山が直接七七を付けた俳句はどれも句末に句切れが置かれていた。また、上五や中七に句切れが置かれている俳句を短歌に書き換える際は、句切れを削除するか弱めることによって短歌の句切れを一箇所に留めていることがわかった。寺山が俳句の句切れをこのように処理した理由を探るため、そもそも俳句の句切れにはどのような修辞的な効果があるのか、その発生史を辿るところから研究を行った。

句切れの発生史及び川本皓嗣と仁平勝の句切れに関する論考を踏まえ、句切れには言葉と言葉の間の論理的関係を断ち切り、喩的関係に置くことが明らかになった。喩的関係とは、言葉が従属的にではなく並列的に並び、互いが互いに解釈の説明ではなくイメージを提供し合っている状態である。

この句切れの修辞的効果を踏まえて寺山の短歌を見てみると、句切れによって言葉の論理的関係が断ち切られ、物語の説明ではなく暗示が発生していることがわかった。ここでの「物語の暗示」とは、短歌を通して人間を主体とした関係性、思想性、心象性が表れるということである。寺山の短歌は句切れを一箇所に置くことによって、説明的にはならず、かつ暗示力と言葉の具象性が保たれているのだと結論付けた。

第二章では「単語構成作法」について扱った。これは、短歌を作る際に空白を残しておき、後からメモとして残しておいた単語や俳句などをそこに挿入するという技術の上に成り立つモンタージュ論である。寺山はこの項目で「俳句性、俳句的即物具象性をレトリックとして、茂吉から誓子、草田男へ受けつがれたものをふたたび短歌にかえす」と語っていた。また、別のエッセイ「火の継走」にて

中城ふみ子の短歌を「新即物性と感情の切点の把握」の試みだと評しており、これも「単語構成作法」に関わる問題であると考えることができる。そのため本章では、斎藤茂吉、山口誓子、中村草田男、中城ふみ子の作品と寺山の短歌との比較を行った。

斎藤茂吉は実相観入の写生を志した歌人であり、特に重要視したのが感情の自然流露である。茂吉の写生は現実世界に観入するというものだが、寺山は自然すらも虚構によって構築しようとする虚構観入の写生を志したのだと考えることができた。句切れという視点から二人の短歌を比較すると、寺山の短歌は飛躍と物語の暗示によって虚構性を獲得していることがわかった。

また、写生を代表する俳人・歌人である正岡子規との比較を行ない、茂吉、子規、寺山の三人の写生の違いを明らかにした。まず、子規の短歌は対象を描きながら対象の視点になるという主客転倒の写生である。次に茂吉の短歌は自己が認識した自然に観入するが自己の視点からは離れない実相観入の写生である。そして寺山の短歌は虚構の「私」が認識した虚構の自然を描くという、虚構観入の写生である。虚構の「私」の視点に立つという点で、寺山の写生は子規の主客転倒の写生と通じている。つまり寺山は、子規の主客転倒の写生と茂吉の実相観入の写生を踏まえながら、新しい虚構観入の写生を生み出したのだと結論付けた。

山口誓子は、モンタージュ理論を俳句に取り入れ、「写生構成」の理念を唱えた人物でもある。「写生構成」とは、現実世界をあくまで素材として見た上で、現実を無視して独自の作品世界を構成するという理念である。また、モンタージュ俳句は言葉の組み合わせを俳句の韻律に乗せることで新しい美を生み出そうとするものである。誓子は「『構成』とは『世界の創造』」と語っており、これは寺山の虚構性とも通じる言葉である。しかし、誓子が名詞と名詞のモンタージュであるのに対し、寺山は名詞と動作のモンタージュであるという大きな違いがある。誓子のモンタージュは映像的な効果をもたらすが心情の暗示には乏しい。対して寺山が意識した名詞と動作のモンタージュは心情の暗示が発生するものである。

中村草田男は俳句に思想性や社会性を取り込もうとした俳人である。また、寺山はジャンルを横断し草田男は俳句に拘ったが、「豊富な具体性と暗示性」を志したという点は両者に共通する。また、秋元不死男の「俳句もの説」を参考にすることで、草田男は「こと」＝思想性、社会性の俳句を目指し、寺山は「もの」＝具象が「こと」を暗示する文学として短歌を選び取ったのだと結論付けた。

中城ふみ子は、平明枯淡な身辺詠が中心の歌壇において、誇張表現や素材の重視という特徴を持って登場した歌人である。特に特徴的なのは一首のなかで複数の具象が等しく存在感を保ちながら暗示性をも兼ね備えていたことであり、これが寺山の言う「新即物性と感情の切点の把握」の試みであると考えることができる。寺山が目指した豊富な具象性と暗示性が同時に成立する短歌の可能性を中城の短歌が示していたのだと結論付けた。

第三章では「第三人物の設計」について扱った。これは短歌の作中主体に自身が理想とする人間像を置き、作者自身がその理想像に近づこうとする意識である。これは私小説性を内蔵した虚構の「私」の創造に繋がる意識である。

寺山は嶋岡晨との様式論争の中で、短歌にはそもそも自己を脚色し再構築する性質があると述べた。そして「『私』がつねに普遍性をもち、万人のなかで自発性をもちうる」ことが短歌において重要であると説いた。また、自身の生活をそのまま記す歌人たちの短歌を「詩情を持たないトリビアル短歌」と称し、「当面の敵」として強く批判した。

その後の岡井隆との「私」性論争を通して寺山は短歌における全体文学の試みとして「私の拡散と回収」という手法を提示した。これは作者の中に「私」の全体像のイメージを持った上でそれを短歌として拡散し、読者が回収するという手法である。ここにおける「私」の全体像とは、個の「私」であると同時に人間全体を包みこむほどの普遍性を持つ「私」である。この「私の拡散と回収」の実践

が歌集『田園に死す』（1965 年）である。これは句切れや具象性のレトリックを連作や歌集単位で行なうことによって、歌集全体で世界観を構築した歌集である。このとき寺山が直面したのは、「私」の全体像を目指しながらも、それを回収すると信じる読者がいるのかいないのかという自問自答の絶望だったと考えられる。寺山自身がどうしても「私」から出発してしまうがゆえに、『田園に死す』は読者を信じようとして信じきれない、「寺山修司」しか映らない歌集となってしまったのである。

この問題を突きつけられたとき寺山は短歌との別れを告げたと考えられる。しかし晩年において再び短歌と俳句への意欲を見せていた。短歌においてはどうしても「私」から出発するという自己肯定の性質を「内面化に向かう膨大なエネルギー」として捉えているがゆえに、短歌の価値を再び見出すためには新たな方法を見つける必要があると考えていたに違いない。それは、自身の創作の出発点である俳句の再検討という試みに表れた。それゆえ寺山は俳句においては同人誌を作ろうと呼びかけていた。結局一句も発表することは生前できなかったが、寺山が俳句に対して未練を抱いていたのはとても重要であると論者は考える。

生前残された最後の俳句集が無い以上は、寺山が高校生時代の俳句をまとめたとされる句集『花粉航海』（1975 年）を再検討する必要があると考える。『花粉航海』には初出不明であり後年になって作られたと思われる俳句が多く見られた。分析すると、寺山の高校生時代の意識である「俳句に社会性、思想性を取り入れる」という試みを後年になって行ったのがこの句集であると考えることができた。そこで寺山の初期の俳句を検討すると、特別な「私」の発生しない滅私の俳句が書かれていたことが明らかになった。これはその後の寺山が試みていなかった領域であり、晩年になって滅私の俳句によって自身の死をあるいは短歌の再生を掴み取ろうとするヒントを論者はここに感じる。換言すれば、寺山がなしえなかった全体像の「私」を拡散し回収する真の読者を求めるためには滅私の「私」を俳句で作るところから始めなければ短歌の死と再生もまたありえないと論者は確信する。

終章では、寺山の死後に行われた座談会「徹底検証　寺山修司は死とどうむきあったか　死はフィクションになりうるか」（1983 年）を取り上げ、寺山がこの世に未練を持っていたこと、最後まで死をフィクション化できなかったことを明らかにした。しかし晩年に俳句への横断を試みたのは死のフィクション化に挑もうとしたからであると結論付けた。また、寺山が後世に残した課題として滅私の表現がある。これは滅私によって内面への志向を深め、「個」にして「全」である「私」を描こうとする全体文学の試みの一つでもある。そしてこの課題を現代に引き継ぎ、滅私の俳句から短歌が持つ「私」性の豊かさへと横断する取り組みが文学の閉塞状況を打開する鍵であると結論付けた。そのために、俳句における滅私の研究や短歌における「私」の豊かさの研究、そしてそれらを統合する実作による試みが必要であると改めて結論付けた。

以　上